知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

DECEMBER 2018 12

ビッグサイズものがたり

ビッグサイズものがたり

その目で見れば誰もが驚く大きなものたちが、
知多半島にはいくつも存在する。
SNSで評判の大きな招き猫から、
あまり知られていないお寺の大きな名品まで、
その誕生の背景を紐解いてみよう。

なんと二匹もいる！ 常滑名物ビッグ招き猫

ボートレースとこなめの片隅に、巨大な陶製の招き猫がいることを御存知だろうか。

高さ約六メートル、重さ約七トンというその招き猫は、メインスタンドの東側にでんと腰を据えている。抱える小判は「億万両」。サイズに合わせて額面も半端ない。間近に見ると、その大きさに思わずのけぞってしまうほどの迫力なのだが、横に建つ大きなメインスタンドの陰に隠れがちで、また、設置場所も子供向けの屋外遊園地の一角なので、サイズの割に少し目立っていないのが惜しい気もする。とは言えその姿は、来場したボートレースファンに福がもたらされるよう密かに見守っているかのようで、勝負前に拝めば御利益もありそうだ。

この陶製招き猫は、今年がちょうど生誕三十周年というメモリアルイヤーである。

元を辿るとこの像は、平成元年（一九八九）に名古屋で開催された世界デザイン博覧会に出品するため、常滑焼の製造に携わる若手が中心となって組織された「まねき猫制作実行委員会」が、約八か月をかけて作りあげたもの。発泡スチロールで原型を作り、

ボートレースとこなめの巨大招き猫（表紙も）

全体を十数のパーツに分割して形成・焼成し、会場に運搬してクレーンで組み上げようやく完成という、なかなか手間のかかった作品だった。三会場で分散開催されたデザイン博では、名古屋城会場の正面ゲート付近に設置されて、来場者の度肝を抜いたという。

役目はもちろん、常滑焼のPRである。実行委員会が博覧会後に制作した記念誌「MANEKU」に実行委員長の清水英明さんが寄せた一文によると、当時の常滑焼は「ここ十数年沈滞気味」と言われるような状況にあり、博覧会を機に常滑焼をもっと知らしめたいと考えたのが始まりだったという。招き猫を選んだのは、招き猫の主産地が常滑であることを知らない人が多いから、ということを理由に挙げている。

今では「常滑といえば招き猫」と言われるほど定着し、市の公式キャラクターにまでなっているのに、三十年前まではそうではなかったというのである。その後の躍進を考えると、この陶製招き猫は常滑焼の歴史におけるエポックメーキングな作品と言えるのではないだろうか。

さて、大きな招き猫と聞いて頭に浮かぶのは、最近ではイオンモール常滑の招き猫だろう。

その招き猫があるのは、寺院の本殿を思わせるゲートに大きな提灯が吊り下げられた「常滑のれん街」のエントランスを入ったところ。天井の高いロビー真ん中に姿を現す招き猫は、高さ六メートル五〇センチ。陶製ではなくFRP（繊維強化プラスチック製）だが、そのインパクトは絶大だ。先の陶製招き猫ともども「世界最大級」の謳い文句にふさわしいサイズ感である。

名前は「おたふく」。福を多く招く、という意味を込めて命名されたという。抱える小判には金額ではなく「常滑」の文字が入っており、観光客や他地域からの買い物客には絶好の記念写真撮影スポットになっている。取材の合間にも何組かの家族が撮影を楽しんでいた。このほかにも館内には、金色の姿をした縁結びの招き猫「おむすび」がおり、それに加えてとこなめ焼協同組合会員や愛知県立芸術大学の生徒が作ったオリジナルの招き猫もあちこちに置かれている。イオンはこれらを総称して「招き猫ストリート」と呼んでいる。

招き猫だけでなく常滑陶芸作家協会会員の作品展示コーナーが常設されていたり、壁面に焼酎瓶があしらわれていたり、LIXILの最新式トイレがあったり、やきものや物産を常時販売する「知多半島マルシェ」があったりと、地元色が非常に色濃いのが特徴だ。大型ショッピングモールというと基本的に同じ構造をしているイメージもあるのだが、このようなモールも珍しいのではないだろうか。

ゼネラルマネージャーの岡田拓也さんに聞くと、平成二十七年のオープンに先立つ二年ほど前、イオンモール常滑の方向性を検討するプロジェクトチームを立ち上げる中で、巨大招き猫の構想が浮上したという。常滑は商圏こそ小さいが、セントレアのお膝元という他にはない特色を持つ。ならば、地元客ばかりでなく旅行者をも呼び込めるようなエンターテイメント性の高い仕掛けを施し、ひいては交流の拠点になる施設を目指すべきではないか。そんな考えから、近隣施設とは一線を画するモールがデザインされ、そのシンボルとして巨大招き猫を誕生させることになったのである。

当初は陶製の像を構想したが重量がネックになり、最終的にはFRP製になった。また、右手を挙げるか左手を挙げるかも議論になったとか。一説では、右手上げは金を招き、左手挙げは福を招くとされているが、常滑を訪れた人に福が授かるようにとの思いから左手挙げに落ち着いた。

イオンモール常滑の来店者は、インバウンド（訪日旅行）の外国人観光客が二年前より倍増しており、免税売り上げも全国のイオンで第三位を誇る。地元の人すら驚く巨大招き猫は、続々訪れる外国人にとっては強烈な印象を与えるに違いない。日本の片隅の小さな町の名が、世界の人の心に刻まれていることだろう。

野間のお寺には大きなモノが潜んでいる

常滑と並んで知多半島を代表する観光スポット、美浜町の野間大坊を参拝すると、境内に不思議な円筒がいくつも建てられていることに気付くだろう。直径十センチ、高さ二十センチほどの鉄製で、表面には模様のような文字のような、不思議なデザインが施されている。それは回転させられるようになっており、傍らに建てられた案内板には「右手で手前に引いてオンマニパドマフン（蓮花の上に幸あれ）を唱えてください」とある。

この謎めいた円筒が何なのかわかるのは、おそらくチベット仏教に関心のある人くらいだろう。これは「マニ車」と呼ばれ、チベット仏教徒が用いる仏具だ。マニは「如意宝珠」の意味で、如意宝珠は願いを叶え福をもたらしてくれる珠のこと。筒の中には経文が入っており、表面に刻まれているのはマントラ（真言＝菩薩の教えなどを象徴的に表した神秘的な言葉）。このマニ車を、案内板に書かれた言葉を唱えながら回せば、回した数だけ経を唱えたのと同じ功徳が得られるというもの。

見どころ豊富な野間大坊は、ちょっとした「仏教テーマパーク」とも言えるような場所でなかなか楽しいが、マニ車のような神秘的なアイテムも、その独特の風情を作り出す装置のひとつになっている。

そんな野間大坊の片隅に巨大なマニ車があることは、あまり知られていないのではないだろうか。それがあるのは、源義朝の首を洗ったと伝わる「血の池」の裏側に建つ御堂の中。広い境内の東の外れに位置するここまでやって来る参拝者は少なく、ひっそりとした場所である。御堂の中を覗けば、誰もが驚かずにはいられないだろう。そこには、見上げるような大きさのマニ車がでんと据えられているのである。サイズが大きいぶん表面に記された文字は大きく、その周囲にあしらわれた文様も細かくて多彩だ。

住職の水野真円さんによると、このマニ車は先代住職が三十年ほど前に設置したもの。先代がチベット仏教の僧侶らと交流していたことがきっかけで造ることになり、ネパールで製造したものを運んできたとか。当初は、倉庫

大きな招き猫ならば、招く福もきっと大きい

イオンモール常滑の「おたふく」。シーズンによって飾り付けが変わる

として使っていた小屋の中に据える予定だったが、届いてみると想定より大きく、急遽サイズに合わせて建て替えたのだそうだ。筒の中には参拝者が寺に奉納した般若心経の写経が納められており、表面の文字は般若心経を表している。試しに回してみると、さすがに重い。

野間にはマニ車のほかにもうひとつ、国道247号沿いの正蔵寺に「回すことで功徳を得られる」大きなものがあり、山門の横に建つどっしりとした土蔵の中に収められている。普段は扉が閉じられているが、住職の中村秀道さんにお願いして扉を開いてもらった。

暗くひんやりとした土蔵に光が入り込むと、そこに姿を現したのは、ピラミッドを逆さにした台座の上に乗った、大きな厨子を組み合わせたような木製の建造物だった。六つの厨子を背中合わせに並べて六角形の構造体にしており、全体では野間大坊のマニ車よりさらに一回り大きなサイズでなかなかの迫力である。また、大きさもさることながら、神社仏閣の建造物や山車彫刻さながらの木組みや彫刻が施されており、腕利きが手掛けたであろうことが一目でわかる。実に美しい一品だ。

六角形のうち正面の厨子には弁財天が鎮座しており、その他の面の厨子には和綴じの経本が積み上げられている。燈籠の基礎部分に似た石勢の台座に心柱（軸）が差し込まれ、触れただけではびくともしないほどの重さだが、思い切り力を入れて押すと、なんとか回すことができた。

これは「一切経蔵殿」と呼ばれるものである。一切経とは仏典を総集したもので「大蔵経」ともいい、これはその六百巻が収められている一種の本棚だ。と言っても単なる収納用具ではない。六百巻もの経典を唱えるのは非常に大変なので、これを回すことによって全巻唱えるのと同じ功徳が得られるという意味を持っているとか。

造られたのは江戸時代末期の文化・文政の頃で、野間の千石船の船主が寄進したもの。地元ではむかし一切経蔵殿のことを「廻り弘法」と呼んでいたとか。これそのものは弘法大師とは無関係だが、正蔵寺は直伝弘法の第五十四番札所であり、明治時代に知多四国霊場の札所を受け持っていた時期もあるので、土地の人たちは弘法大師と関連付けてそう呼んだのだろう。千石船も弘法さんも、この地域らしいエピソードだ。また、本堂には、海の町らしく船に乗った観音像「宝船観音」も祀られている。

昭和二十年（一九四五）に発生した三河地震で心柱に不具合が生じて長らく回せなかったが、平成元年に修復して、再び回せるようになったとのことである。

日本最大級の木造仏か！富貴市原の大きな弘法さん

弘法さんといえば、寺に祀られている弘法大師像は小さいもので二～三十センチ、大きくても一メートルに達するものはなかなかなく、平均すると五～六十センチといったところではないだろうか。ところが、武豊町富貴の岡川寺には、とんでもなく巨大な弘法大師の木像が祀られている。

岡川寺があるのは富貴で最も内陸に位置する市原地区。幹線道路から少し入り込んだところにある静かな農村集落で、低い丘の斜面に民家が集まり、西側と南側には小さな川が流れている。少し変わった寺号は、そんな地形を表しているのだろうか。

境内には二つの御堂が並んでおり、山門から見て左手にあるのが弘法堂である。中に入って、誰もが思わず仰天するだろう。そこに座しているのは、高さ三・六メートルもある巨大な弘法大師だ。右手に数珠、左手に金剛杵を持ち、澄んだ瞳でじっと前を見据えるどっしりとしたその姿は、圧倒的な存在感を放っている。高さだけなら先に紹介した招き猫たちの方が大きいのだが、この像からはサイズ以上の大きさを感じるようだ。

この像は「恵當大弘法大師」という。恵當は干支を好字に置きかえたもので、この像に十二支の守護仏八体を従えていることによる名前だ。像の両脇と背面には千手観音（子年）、虚空蔵菩薩（丑年・寅年）、文殊菩薩（卯年）、普賢菩薩（辰年・巳年）、勢至菩薩（午年）、大日如来（未年・申年）、不動明王（酉年）、阿弥陀如来（戌年・亥

野間大坊の大マニ車と住職の水野真円さん

境内にある標準サイズのマニ車

正蔵寺の一切経蔵殿

本堂に祀られている宝船観音

大きなものに包まれて、大らかな心が育まれる

年）の八仏と、干支の置物も安置されている。

恵當大弘法大師が建立されたのは昭和二年（一九二七）。その三年前に関東大震災が起きており、世の中があまり穏やかでなかった頃だ。貧しい農村だった市原からは関東方面に出稼ぎに行く者も多く、巨大地震の被災は他人事ではなかったのだろう。当時住職だった大心充雄師は不安を抱く土地の人たちと接するうち、暗い世相に生きる人々を救済したいと考えた。そうして寺の本尊に祈るうち、大師像の造立を発願（ほつがん）。近郷の人から多大な寄進を受け、三年の年月をかけてこの像を完成させたのだった。

住職の坂野俊雄さんによると、これを手掛けたのは、大須観音に近い名古屋の東橘町にあった播摩屋の後藤万三郎という仏師。全体を六つのパーツに分割して作り、名古屋からここまで運んで組み合わせたとか。万三郎は大弘法像を二体造立し、うち一体は兵庫県の寺に安置されたらしい。また、八仏と十二支を造ったのも万三郎だそうだ。

最近は、良縁や子宝祈願に訪れる親たちの参拝も多いという。大きな弘法さんの大きな懐は、多くの人を悩みや願いを受け止め、包み込んでくれる。

岡川寺の恵當大弘法大師と住職の坂野俊雄さん

参考文献◎記念誌MANEKU（まねき猫製作実行委員会）　取材協力◎イオンモール常滑／ボートレースとこなめ／鶴林山野間大坊（大御堂寺）／天網山正蔵寺／法光山岡川寺